

「抱く」について

— 国語史的観点から —

一

古代日本語においては、一般に語頭に濁音、ラ行音が表われることはなかった。これは韓国語とともにウラル・アルタイ系言語において、ラ行音、濁音が語頭に立たないことと全く一致しており、日本語とて決して例外ではない。このことは日本語固有の言語、すなわち和語に関することであり、借用語たる漢語等についてはその限りではないが、それでも語頭の濁音を避けようとした傾向は、

胡麻 陶隱居本草注云胡麻音五萬訛云宇古末本出大宛故以名之
(和名抄・道円本)

の如き例でもわかるように大きなものがある。現在普通

鎌倉 暄子

に行われている「薔薇」にしても、例えば、
うれへつゝ丘に登れば花いばら(蕪村)
等と見えるイバラ、

荊 ムバラ 薊 ムハラ (名義抄)
刺 ムハラ 茨 ムハラ 薊 ムハラ 刺刺 ムバラ (名義抄)

の如きウバラ、ムバラのウ・ム・イが脱落した語形であり、
「何処」にしても、

伊豆久欲利(万葉集・八〇二)

春霞たてるやいづこ(古今集・三)

従何(高山寺藏虚空藏菩薩所問経嘉承元年点)
何にか往き何にか来りて(将門記承德点)

の例からも判かるように、イツク(コ)・イドコのイが脱

落して出現したものと見なされる。「誰(だれ)」もドコ・ドレ等の類推によって、タレが濁音化したものと考えられる。ラ行音にしても語頭に立ち得ないことは、例えば、ロシアをオロシアと称したことなど、韓国語においても語頭のラ行音を季^イ・利^イ・里^イ・龍^{ヨンスン}山^{ヨンスン}などの如く忌避しているのと符号しており、語頭の濁音を避ける傾向が看取され、参考ともなるであろう。

ところで「抱^だく」は、ムダク→ウダク→イダクと変化し、イの脱落によってダクが生じたと見なされ、疑念をさしはさまれたことはない。ムダク→ウダク→イダク→ダクと変遷を遂げたことは文献に現われた表面的な事例からは事実だとしても、その変化を一面的にのみ捉えることが果して妥当なことであるか、再考してみるのも無意味とは思われない。日本語の変遷を考える上では、諸条件を多面的に考慮する必要があると見なされるからである。本稿では「抱^だく」の例をとりあげ、語彙の変遷の一面を国語史の一つの試みとして辿ってみたいと思う。

二

国語史の実体は、単に文献上の表面だけでなく、個々の語彙の実体・地域差・言語の担い手等を併せて立体的に考慮しない限り、その真の姿を我々の眼前に曝すことはない

であろう。前稿では国語史の一つの試みとして「四つ仮名」の問題を取り挙げたが、ここに取り挙げる「抱く」についても、その発声上の必然性・音韻環境等を含め、総合的に考慮しなければならぬ問題を含んでいるようである。「抱く」については、

「イダク」(懷・抱)といふ語の歴史的変化なども、全く訓點資料によつて明かに蹤づけることが出来た。

元來この語は萬葉集に「武太伎」、八十卷華嚴音義に「牟太久」とあるが、靈異記に至つて「于田支」と変じ、源氏物語や枕草子に至ると「いだく」になつてゐて大體の変化はわかるが、更に訓點を見ると、成實論天長點の抱字に「ムダカハル」、一訓「ムダカム」と附けてあり、大智度天安點の「擁抱」に「ウダキ」、十論經元慶點の懷字に「ウダク」、法華經義疏長保點の抱字に同様「ウダ○テ」とあり、下つて將門記承徳點の懷字抱字が「イダク」となつてゐる。但しこの「ウダク」は大分後の訓點まで因襲的に用ゐられてゐる。將門記の「イダク」は遙か以前に変つた語らしいが、私の見た訓點の範圍では未だ他に見出せない。さて將門記より以前已に金剛界儀軌寛仁點の抱字の「ダ イテ」、神呪心經寛徳點の懷字の「ダク」、蘇悉地經承保點の懷字の「ダク」が見えるのである。かくしてこ

の語が、ムダク↓ウダク↓イダク↓ダクの順序で変化して行つたらう大要が明かになるわけである。實に訓點は語彙の歴史的変化を見るに必須な資料を供してゐる。(春日政治『古訓點の研究』)

と述べられている一言に盡くされており、非常に示唆的であると言えよう。

ところで、例えば九州の筑前方言・筑後方言においては、現在なおダクと共にウダクが用いられている。意岐方言においてもウダクは現存しており、高知県、石川県にも今なお残存していると言う。これは正に方言に古語が残存した一例と言って差支えなく、刮目すべき事実である。つまり、古くから少くとも平安中期以前から残存し続けてきた遺影と言うべきであろう。ムダク↓ウダク↓イダク↓ダクと変化を遂げたと言われるダクは、その存在を各時代に渡って確認することが出来る。例えばロドリゲスの『日葡辞書』に、

idagiague (イダキアゲ)、idagi, u (イダキ、ク)

daquoroxi (ダキオロシ)、daqiague (ダキアゲ)

の例が見出され、イダク・ダクが両用されていることがわかる。コリヤードの自筆本と言われる『西日辞書』には、

Fiza vo daqi (膝を抱き)

vxiro cara Fittato dagisucume (抱きすくめ)

「抱へ」について

の如くダクが見られ、キリシタン資料の天草版『伊曾保物語』『平家物語』にも、

daqi cacayete fubino cuayereta (抱き拘へて)
(伊曾保物語)

menoto daite maita uo (抱いて参ったを) (平家物語)

Toquano futocoron dacarete (ふところを抱か
て) (同右)

Niydono mazzu xenteiu daqitatematcuri (抱きた
てまつり) (同右)

の如くダクがごく一般的に用いられている。天草版『平家物語』には、

Qimino idagi aguemairaxe (いだきあげ参らせ)

tcumaguini varabi vorisoje idacaretana (いだか
れたは)

と、イダクの例も見え、イダク・ダクの併用が見られるのである。『延慶本平家物語』にも、

此薄光所ヲ懷ムト、次第二伺ヨル。如案ノサト光所ヲ
ミシトダク。懷レテ此物騒グ。(第三本・63才)

サリトテハサテアルベキニアラネバ、片淵ノ有ケル所
ニテ興ヨリダキ出シケレバ、(第6本・67ウ)

の例とともにイダクの例も、

文学イダカレナガラ、右宗ガコガヒナヲ突ク。(第二
末・27ウ)

怒レル時ハ七尺ノ男モ殺死シ、咲テ向ヘバ三歳ノ嬰兒
モ抱カレケリ。(第二中・130オ)

ハヤ被討一サセ給ニケリト見進セケルニ、ハヒ出テ、
懷付マイラセバヤトハ思ヘドモ、(第二中・68オ)

空シキカラダヲ此女房イダキテ、(第六本・68オ)

の如く見え、ダク・イダクが両用されている。このような
事例に加え辞書類にも、

モノヲダク如何 タクハイタク也 抱也 懷也(名語

記)

抱^{ダク}(合類節用集卷八中)

擁^{ハウ}(同右・卷八中)

抱^{イダク}又懷保
並同(同右・卷八上)

復^{ハウ}我^{イダケリ}後集 腹^{イダケリ}我^{ウレヲ}上(同右・卷八上)

と見えていることは、鎌倉末期・室町時代にはダクがかな
り一般的に用いられていたことを示唆している。

寄りて抱^だけば、顔を見合はせて、「遠う往にし人なり
けり」と思ふに、(古本説話集・28)

何じゃ、手を出いて。懷^だらう、を、抱きませうく。
さらばだきませう。(虎寛本狂言・子盗人)

等と見えるダクは、規範的・文語的要素を強めていったイ
ダクに対して、次第に庶民的・口頭語的傾向を帯びるよう
になり、江戸時代に入ると、

抱^{だきうは}姥は若子さまに事よせて近寄り、お子を清十郎にい
だかせ、膝に小便しかけさせ(好色五人女・一)

の如きダク・イダク両用の例も見られるが、その多くはダ
クが用いられ、

三十四五のかみさま。八ッばかりのむすめをつれ、二
ッばかりの子をだきて、(浮世風呂・二上)

女子でさへ心氣が湧く裸身をむっくりと。抱^だいて寐た
いと褒むるも有り杉がはたと手を打って。(鍵の権三

重帷子)

と、その例は枚挙に遑がないほどである。

ダクについては前記春日政治『古訓點の研究』に指摘さ
れているように、訓点語においては既に平安時代まで朔る
ことが出来る。

王、法師ヲ抱^ダイテ慟哭ス(大慈恩寺三藏法師伝・一)
文ハ風雲(ノ)「之」潤(ヲ)抱^ダ(ケリ)(同右・七)

寂ヲ蘊ミ眞ヲ懷^ダケル「之」誠(同右・八)

等の例が見え、角筆文献においても、例えば、

抱^ダ(東大寺図書館蔵法華文句平安中期点)
抱^{タイテ}(石山寺本金剛頂蓮花部心念誦儀軌寛仁四年点)

抱懷（天理図書館蔵日本往生極樂記応徳三年点）

ダキアゲズ（長承本打聞集）

の如く見える。平安末期には、

こひこひてたまさかにあひてねたるよのゆめはいかか
みるさしさしきしとたくとこそみれ（梁塵秘抄460）

の例もあり、少くとも平安後期から院政期にかけてダクが存在していたことは動かないであろう。このように平安後期から院政初期がダクの古例とされているが、ムダク↓ウダク↓イダク↓ダクと変化を遂げて来た結果として前掲の如き例が見出されるのであろうか。

ところでダクはイダクの頭音が脱落してできた語であり、イダクは平安初期から、ダクは平安後期頃から用例が表われ初めると言われるが、そのダクも『宇津保物語』^{〔注5〕}においては、

よろこびて、けふそくにしりかけて、かきいだきあげ
給へば、心しうひたる人にだきつきてはべる。おとゞ、
ゆみはしりひきて、うちこはづくり給。（国ゆづりの
下）

御うゑわたらせ給へば、みないだしすへたてまつりて、
めのとたちは御木丁のうしろになみゐて、いづれの宮
をかまづだき給といどみかはしてみるに、二宮あそび
たまふをかきいだき給て、御ひぎにすへつゝ、かきな

「抱く」について

でつゝみ給。（国ゆづりの下）

「さも侍らず。たれもく、にしの御方にわたりおは
しまして、見たてまつらせ給はんとありしかど、御丁
のうちにかくいだきたてまつりてなん。たゞ東宮のわ
か君たちなん、おとゞのきみにだかれたてまつり給て
おはしまして、かくしたてまつりしかど、うちのうへ
をも、こなたの上をも、うちかなぐりたてまつり給つゝ、
『宮のちごみせよく』よの給しかば、上なむ、うた
れわびてみせたてまつり給ひしか、うつくしみていだ
きもちておはせし。」（くらひらきの中）

大殿じらう中納言の御かたらうとうの中將その御をと
うとしゐの少將、大宮の御方にびわきこえ給て、「こ
れ」とてひかせたてまつり給へば、「人にだかれでは
ひきはべらず」との給へば、「おはせく」とていだ
き給て、ひかせたてまつり給へば、いとになくおもし
ろくひきたまふ。（楼のうへの上）

くるしう思給らんとて、「しもへ」ときこえ給へば、
「月あかきにはなをねでひさしうひかん」とて、夜中
までおはす。おり給にも、いぬ宮をろうのはしまでだ
きたてまつり給て、めのと人くまいる。いだきうつ
させ給て、かんのおとゞの御てかけさせ給つゝ、おろ
したてまつり給。（楼のうへの下）

の如く、イダクと共に用いられていることは刮目してよく、一概に写本の問題とばかりは言えないのではあるまいか。

平安時代の物語・日記等においては、例えば、

鉄ノ火ノ柱ヲイタカシムルニ肉ミタレ骨クタケヌ（三

宝絵詞）

女ぬりこめの内にかくや姫をいたかへてをり（竹取物

語）

女いたきてゐたるかくやひめとに出ぬ（同右）

二宮みつけ給てまろも大将にいたかれんとの給を（源

氏物語）

の如く専らイダクが用いられ、『宇津保物語』においてもその用例の多くはイダクであることを考えると、イダクが当時の規範語であったことはさして見当はずれではあるまい。ただ、ムダク↓ウダク↓イダク↓ダクと時間的変化を遂げたとばかりは言えないように各時代にダクの用例が散見する。特に会話文、訓点資料などにその多くが見られることから考えると、主に庶民語、日常語に用いられたのではないかと注目され、言語の位相に基因しているのではないかと見なされなくてもない。文献の相違はあっても、文献に徴する限りイダク・ダクが共存していることは否めない。冒頭に挙げたイバラ・ウバラにも、例えば、

何故か虚空の中の刺（ハラ）を抜かぬ（東大寺本大般

涅槃經平安後期点）

刺ある草木をすべてばらと云は棘の一名波羅樹と云に

よりてなるべし（理齋隨筆・五―三六）

方百里雨雲よせぬばらの花（蕪村）

の如く、バラの用例が各時代に見られることは傍証になるであろう。

三

ムダクから変化したと言われるイダク・ダクは、既述した如くイダク↓ダクと時間的変遷を遂げたとばかりは言えないように、時代的に共存している事例が多く見られた。ところでムダクは、

上野安蘇のま麻群可伎武太伎寝れど飽かぬをあどか我

がせむ（万葉・三四〇四）

抱持^{上取也}牟太久（小川本新詠華嚴經音義私記）

抱^{ムダカハル}（ムダカハル）（成實論天長点）

懷^{ムダク}（書陵部本名義抄）

の如く、数多く見ることは出来ないがその例を見ることが出来る。一方ウダクは、

懷^{于太支スルモノ乃如支}（根津美術館所蔵大乘掌珍論平安

初期点）

擁抱^{ウダキ}（大智度論天安点）

内に腐ク敗レたることを懷クこと穢き蝸螺の如し（聖語藏本大乘大集地藏十論經元慶七年点）^{〔注7〕}

抱 有太加之口 抱 于田支 （興福寺本日本靈異記）

於レ琴^ニ皇后令^レ懷^ニ抱皇子^ヲ（垂仁紀）

雅澄懷^レ道^ヲ遇^ニ二石之兇殘^一^{〔注8〕}（大慈恩寺三藏法師伝承德点）

懷 ウダイ（て） （大唐西域記長寛点）

等と見られ、文献に徴する限りムダクの例の方が早い時期に見えることは否定できないが、ウダクにしてもその例は一時期に限らず、広く各時代を通じて見出せることは前掲の用例からも明らかである。前にも述べたが、イダクが平安時代物語・日記等に、

オモト人ニイタカシメ寢殿ニイタル程ニ（三宝絵詞）

せうとなる人抱^{いだ}きてゐて行きたり（更級日記）

月をば脚の下にふみ、日をば胸にあて、抱^{いだ}き給ふとなん、見て侍る（蜻蛉日記）

の如く一般的に用いられており、その他、

懷・抱 イダク（将門記承德点）

の如き用例から考えると、少くともウダク・イダクは同じ時期に用いられていたことは認められ、ただイダクが訓点資料においてあまり見出されないことから考えると、ダク・イダクの関係と同じように位相差があったのではないかと

「抱く」について

考えられるのである。平安末期以後しか見出せないと言われるダクの用例にしても、前述の如く訓点資料や『宇津保物語』にその例を見出すことが出来、平安中期以前にも存在していたことは否めないであろう。あるいは、平安初期頃まで遡るのではないかと推定することも強ち的はずれとばかり言いきれものではあるまい。

ダク・イダクの共存、そしてイダク・ウダクの共存がそれぞれ時代の通じて見られることから考えると、ムダク↓ウダク↓イダク↓ダクという変遷過程は表面的には首肯されるものの、時の流れとともにこの様な変遷を遂げたのではなく、ムダク・ウダクの共存する時代があり、下って平安時代にもなるとウダク（ムダクも幾分かは残存しているが）・イダク・ダクが同時に共存して行なわれた蓋然性がないわけでもなく、それがかなりの年月続いたと見なすべきではあるまいか。ムダク・ウダクの交替は「孫」ムマゴ・ウマゴ、「鰻」ムナギ・ウナギ、「薔薇」ムバラ・ウバラの如く十二分に認められる現象であり、又、ウバラ・イバラの如きウ・イの交替も容易に認められ、ウダク・イダクが共存しても何等不思議なことではない。例えばウダク・イダクが、

抱 イダク ウタク（名義抄）

勒 イダク カキウタク（同右）

先王大^(き)に歡喜^レして、入^(り)て池^ニに自^ラ撫^{トリ}鞠^キ、持^リ以^テ

授^(け)て夫人^一に、「汝^が子^{なり}、應^ニ・といふ欣慶^一す。(石山

寺本大方廣佛華嚴經古点)^{〔注9〕}

若^(し)有^(る)衆生^(の)抱^イ持^ツ我^ハを、則^チ離^レ貪

欲^を、(同右)

慕^(が)フこと異^(に)して懷^{ウタ}レ^(け)は・イ^(た)げば荒^(れたる)ことを(知

恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓古点)^{〔注10〕}

等と、同一文献中にその例を見出せることから容易に認め得ることであろう。

この様に見てくると、例えばウバラ・イバラ、ムマゴ・ウマゴのム・ウ・イが脱落してバラ・マゴとなったように、ムダク・ウダク・イダクのム・ウ・イが脱落した語形ダクが生じ、ダクは今日までウダク・イダクと共に残存していると考えられることも出来よう。少くとも、ムダク↓ウダク↓イダク↓ダクと時間の経過としての変化を考えるより、このように平行的な解釈を付加した方がより自然な理解と思われる。

語彙の歴史的変遷は、表面上に表われた、つまり文字表記されたものからしか推し測ることは出来ない。ある意味では仕方のないことでもある。一つの語彙が変化をしていく過程での共存、つまり変化を遂げたものと元の姿のものとの新旧の共存は勿論あり得ることであり、数々の実例が

それを物語ってもある。ただ、ここで取り挙げたダクに関しては既述してきた如く、変遷過程における共存というだけでは片付けられない程、各時代にそれぞれの用例が見出される。そこにはその語が本来持っている性格、発声上の必然性といったものが看取されるのである。現実音は知る由もないが、ここに一つの推定をなすことで、語彙の変遷の一面を知る手がかりとしたい。

四

ウ・イの交替はさることながら、ムダク・ウダクは本来は同じような発音で、非常に近似した音ではなかったろうかと思われるもない。ムと聞かウと聞かかは個人差であり、その場合場合によってムダクあるいはウダクと聞いたのではあるまいか。ムダク・ウダクは表記上の違いであり、実際の発音は極めて近い音で、場合によってはいずれにも聞こえるということではなかったろうか。現存の中国語や韓国語でも同一語が「B」音に聞こえたり「D」音に聞こえたりすることがあるように、例えば「梅」が奈良時代ではウメであるが、平安時代ではウメともムメとも、特に中期以後にはムメが多く用いられているのと同じ一見揆を一にしているように見なされるのである。つまり、「梅」は本来の発音は「mme」に近い音であったかと思なされる

のである。「馬」がウマ・ムマ両形あり、その他ウマコ・ムマゴ、ウバ・ムバ、ウマル・ムマル、ウベ・ムベ、ウモレギ・ムモレギ、ウバタマ・ムバタマ等々も同一線上において把握されるべき現象と言っても差支えあるまい。奈良時代にはウメと表記されていた「梅」が、平安時代になるとムメに変わっていることに對して、「本来の日本語としては、マとメとモとの前にはウとムとがともに立ちえない」ことを前提として亀井孝氏は「梅咲きぬどれがむめやらうめじゃやら」（『亀井孝論文集6』所収）において、自響音「[ɐ]」を想定し、日本語の音節構造に照してそれぞれウとムとを共に擬したもので、「音そのものの変化にはあらずして、同定のしかたに對する改定としての変化であつたにちがいない。」とされ、ム・ウの場合は音は同一または同一に近い響きであつたろうと見なしておられる。示唆に富み、肯綮に當る説と言えよう。現実音は推定の域を出ないが、ある場合はムの近似音に聞こえ、ある場合はウの近似音に聞こえたのではないかと推察されるのである。つまり、音と表記の關係は唯一無二ではなく、聞く人によってムともウとも表記されたものと見なすのが事実に近い解釈ではないかと考えるのである。ウメ・ムメやウマ・ムマの如き借用語と見なされる例は一応おくとして、ウベ・ムベ、ウダク・ムダク等は「[mbe]」、「[mdaku]」の如きものであつた

「抱く」について

のではあるまいか。「[mbe]」、「[mdaku]」等の実際に発音される口にこもった「[ɐ]」音が、次の「[m]・[b]・[d]」に融合して脱落してゆくが如き現象を呈したのではないかと思われるのである。

「郁子」は『名義抄』に「ムベ」とあり、「榎 郁子ムベ一名掾」、「掾 ムベ」ともある。『本草和名』には「郁 榎 和名字倍」、「和名抄」には「郁子一名掾 和名牟閉」、「伊呂波字類抄」に「宜 ムヘナリ ムヘナリ」「宜哉 ウヘナルカナ ムベナルカナ」と見えることを参勘すれば、少くとも平安中期頃にはウベ・ムベの両形があつた蓋然性は否めないようである。『新撰万葉集』に、

鶯者郁子牟鳴監（上・春）
うぐひすはむべもなくらむ
 郁子裳云芸里（上・秋）
むべもいひにけり
 郁子山風緒（下・秋）
むべやまかせを

と見えるのはムベの表記に用いられているが、「宜」を「郁子」の借訓によって表記しているから、ウベの訓も否定し去ることは出来ないように思われる。とすれば、ウベ・ムベは平安中期以前に既に両形が存在していたのではないかと考えられる。そして、実際の発音は「[mbe]」の如きものではなかったかと推察されるのである。現在の方言でも、例えば熊本県南部や鹿児島県北部ではウベともムベとも言っているようであるが、実際には「[mbe]」という発音に酷似

している判断されるのである。「孫」についても、

各居^二鰥寡^一曾无^二子息^一（于^レ万^二古^一）（靈異記・中）

嫡孫・衆孫 古記云、…俗云^二宇麻古^一也（令集解・喪葬）

孫爾雅云子之子為^レ孫 和名無萬古（和名抄）

大鷦鷯天皇^{（ミムナヅ）}菅田天皇之第四子也。母曰^二仲姫命^一五百

城入彦皇子之孫也（仁徳前紀）

自^レ令以後^{（コ）}子孫^{（ミムナヅ）}八十聯綿、莫^二預群臣之例^一（雄略紀）

と見え、ウマゴ・ムマゴについても同一線上の問題として把握できるであろう。先にも述べた如く「[mnaɡo]」と発音される口にこもった「[ɐ]」音が、次の「[e]」音と融合して、語頭の「[ɐ]」音を脱落させたと思えるのである。平安時代中期の仮名文献に、

宰相の君は、富の小路の右の大臣の御孫、それ二人ぞ上にゐて、見給ふ。（枕草子・二七八段）

をのこども、火をともして見れば、昔、こはたといひけむが孫^{（まご）}といふ。（更級日記）

の如き例も見出され、このような事例から推測しても、少くとも平安時代中期以前から、ムマゴ・ウマゴ・マゴの形が行なわれていたものと思つて差支えあるまい。

五

ダクの早い事例として先に挙げた『宇津保物語』に、

御門おひいでぬべきものと御らんずるに、ちゝがともにつくしにくだりて、もろこし舟のかへりみにいで^{（ママ）}たち、もろこし人、「わがくにゝおひいづるものにも、をとらぬものかな」とて、うばひとりて、ゐていぬ。

（藤はらの君）

ばくちどもの、「いであるまじきこといふくそたちかな。…かの殿は、もの見^{（ママ）}このみし給所也。いで給へらんを、あつとりてうばひとりるばかりぞ。」（藤はらの君）の如きウバフの例とともに、

おほいと、をのこおものす。あさめ・くりやめあり。

「とうゑひがかしはで庭のみたさう」といひてばいか^{（みたえ草カ）}へり。これ坐につきたる進士・□才^{（す才カ）}、このかへあはせて八十人ばかりだいはんにむかひてものくう。（まつ

りのつかひ）

（ママ）らうそくどもあつまりて、こゑを合てのゝしれば、もの見にきたる人々、いとおしくもありおかしきもあり。ばくち、京わらはべ、かずしらずあつまりて、一のくるまをばひとる。とのゝ人々そらはぎすれば、くるまのすだれをかゝげての給、「ばひえつ。これやこの

おしみ給みむすめ。なめきつみぞはからるゝ。をろそ
かなるつみぞれうぜらるゝ。すぐろくのぬしたち」と
いひて、うしかいどもたづみどもうちて、くさかり
ぶえふく。(藤はらの君)

『このわらの御はらなり。いとかしこくなだゝりて、
(苦しうカ)くるうしえずはべりしを、さこそあれ、よりあきら、
かまへてなんばいともてはべる』と申たまへば、春宮
は、いかなることにかあらむとはおぼしながら、(さ
がのゐん)

とのもづかさ、に、「とのい所にをのこどもあらん。と
らせよ」とて給へば、さい將の中將の君の御子、宮は
たといひて、やとせばかりにて殿上にあり、それ「ま
ろをつかひ給へ」とて、ばいとれば、「などかくはの
給」との給へば、宮はた「宮の御もとなれば」といふ。
(くらびらきの中)

とバフの例が見られ注目されるところである。バフの古い
例として、小林芳規『角筆文獻の國語學的研究』に、

能劫^{ハフ}一切の諸の善法^を故^に (東大寺図書館蔵大般涅槃經
長保頃点)

不^レ能^二組^ソ導^{するコト}不^レ奮^{ハハ}威力^を (観智院金剛藏甘露
軍荼利明王念誦法寛弘九年頃点)

不^下為^二一切の暴惡の鬼神羅刹^ラ等^の吸^{スヒ}中^{ハハ}奮^{ハハ}精氣^を (不空
不^下為^二一切の暴惡の鬼神羅刹^ラ等^の吸^{スヒ}中^{ハハ}奮^{ハハ}精氣^を (不空

「抱く」について

羅索神咒心經寛徳二年点

の如き平安後期の例が挙げられているが、このような例は他
にも見出すことができる。『名義抄』には「棄^ムバフ^{ハウ}」、
「掠掠^ウム^{ハフ}」が見え、『前田本色葉字類抄』にも「奪^{ハフ}
ウ^{ハフ}」とあり、『伊呂波字類抄』にも「奪^{ハフ}」字に対して
ウバフ・ムバフとともにバフの訓がある。少くとも平安期
にバフがウバフ・ムバフと共に用いられたことは動かない
であろう。かかる事例は『名義抄』に「薊^{サス}ウ^{ハラ}」「刺^サ
ス^ムハラ」とウバラ・ムバラの両訓があり、『本草和名』に
「營實一名牆薇和名字波良乃美」、『和名抄』に「營實^{名和}
乃美^{無波良} 薔薇子也」とウバラ・ムバラの訓が見えるとともに、
加えて、前掲したバラの用例が存在するのと揆を一にして
いると言うことが出来る。されば「郁子^{ウヘ}」「宜^{ウヘ}ナ
リ」「宜哉^{ウヘナルカナ}」「孫^{ウマコ}マコ」「生産^{ウマル}ムマル」
などとも同一事情にあると見なしても差支えあるまい。と
ころで、この様なバフ・ダクといった事例が見出されるの
に対し、語頭の狭母音の脱落現象だと捉え、規範外の表記
が現われたもの^{〔注1〕}という考えもある。しかし、既述してきた
如く単に母音脱落の現象だけでは理解し得ない点が多くあ
る。バフについても前掲亀井孝氏論文に、

歴史的にとらえるならば、「バウ」は、第一拍の「ウ」
が第二拍の「バ」の音節にのまれた形

とあり、既述してきたことも一致し、示唆的である。つまり、ウ・バ二拍が融合していったその結果が第一拍を脱落せしめた形になしたと考える方が、より自然なのではあるまいか。ただ、ウバフ・ムバフ・バウも実際に発音された場合、「mbafu」の如きもので、ほとんど同じものではないだろうか。つまり、バウと表記されていることがすなわちウ音を完全に捨て去った「bafu」であったことを意味しないのは亀井孝氏の指摘の通りである。場合によってはウとも響き、場合によっては「m」は下の「b」に吸収されたようになりバフと聞こえたのであろう。だからこそウバフ・バフの両形が同一資料の『宇津保物語』に見られ、同様にウダク・ダクも同一作品である『宇津保物語』に共存するが如き現象を示しているものと見なされるのである。加えて、時代が下る『延慶本平家物語』にもダク・イダクの例と同様、

閻魔王ノ使ハ高貴ヲモキラワズ、魂ヲウバウ獄卒ハ賢愚ヲエラブ事ナシ。(第三本・40才)

次ニ陽貴妃ノ乗給ヘル玉輿ヲウバイ取テ、遂ニ殺奉ル。(第三本・4才)

アノ山ノフモトニテ、怖シゲナル者ニ三人出来テ、バ
イ取テ侍也。(第三本・10才)

カゝル処二人見ノ四郎馳来テ、此頸ヲバイトリテ、勸

賞ニ行ワレバヤト思ケレバ、此頸ヲバイケリ。則綱ハ一人ナリ、人見ハ多勢ナリ。無力バワレケレバ、片耳ヲカキムリテ取テケリ。……則綱申ケルハ、「アノ頸ニハ左ノ耳ヨモ候ワジ。其故ハ、則綱ガ取テ候シヨ、人見多勢ニテバイトリ候シ間、則綱ハ一人ニテ候……ト申テ、(第五本・66ウ)

の如くウバウ・バウの両形が見られ、時代の異なるこれらの文献にかかる事例が見られることは、ウバウ↓バウという時代的変遷とばかりは捉え得ない事実を示しているのである。

六

以上、ムダク↓ウダク↓イダク↓ダクと時代的変遷を遂げてきたとされる「抱く^だ」について、国語史の観点から考察をなしてきた。日本語の音韻に関する事はそう簡単なことではなく、推定の域を出ないのはここでもまた然りである。しかし、既述してきたように、ムダク↓ウダク↓イダク↓ダクと時代的に変化したと解釈するよりも、ムダク・ウダクは二重形として存在し、イダクは、例えば「宇乎(万葉・三六五三)」、「紆鳴(継体紀)」、「釣^{伊乎豆留}(享和本新撰字鏡)」、「魚^{宇乎俗}(和名抄)」や、「宇毛(万葉・三八二六)」、「芋^{和名以倍都以毛}(本草和名)」、「芋^{以閉都以毛}

(和名抄)、「暑預^{有毛}」(新撰字鏡)、「暑預^{山伊母}」(享和本
 新撰字鏡)、「署預^{也末都以毛}」(本草和名)、「署預一名山芋
 夜萬都以毛
 俗云山乃以毛」(和名抄)、「慈^{ウツクシ}」(伊呂波字類
 抄)などの如く、ウダクの交替形として発生したものと
 推定され、ウの脱落によってダクが生じたものと理解すべ
 きではないかということである。ムダク・ウダク・イダク・
 ダクは時代的な変化による現象ではなく、少くとも平安中
 期以前に、位相差も考慮されるところであるが、既に行な
 われていたと見なすのが当を得た解釈と考えるのである。
 語によって時代的に新古はあるものの「奮^{ムバフ}」「ウバフ」
 「孫^{ムマゴ}」「ウマゴ」「鰻^{ムナギ}」「ウナギ」「郁^{ムベ}」
 「宜^{ムベナリ}」「ウベナリ」「茨・荊^{ムバラ}」「ウバラ」と揆を
 一にしたものとして把握される。

そもそも古代日本語においては、「ヌ・ノ」、「ツヌ・ツ
 ノ」、「タヌシ・タノシ」、「シヌフ・シノフ」といった音の
 近似による二重形が存在する。ムマゴ・ウマゴ、ムナギ・
 ウナギ、ムバラ・ウバラ、ムダク・ウダクも一種の二重形
 として把握すべきものであろう。ウが先かムが先かは語に
 よって違いが見られ、どちらが古いかは一概には言われず、
 あるいは初めから二重形であった可能性も大きいと言われね
 ばならない。ウ列音とイ列音の交替もさることながら、ウ
 ダク・イダクのウ・イの交替も、例えばウヲ・イヲ、ウモ

「抱く」について

・イモ、ウバラ・イバラなどの如く、極く普通に行われた
 現象であり特異な事ではない。ただ、イダクは物語・日記
 等にその例が多く見られ、訓点資料にはほとんど見られな
 い。位相差があったことだけは確かであろう。ある意味で
 は、ウ・イの交替によって生じたイダクが、平安時代かな
 文献に多く用いられ、その事が規範語・文章語としての地
 位を確立していき、ウダクのウの脱落によって生じたダク
 とは異なる形で現代まで生きのびたとも言えるかもしれない。

既に述べたが、亀井孝氏が「梅」の表記、ムメ、ウメに
 ついて詳細に述べておられる。ムダク・ウダク・イダク・
 ダクの関係を知る上で非常に示唆的であり、刮目すべきこ
 とである。しかし、文献時代以前に我国に将来された「梅
 ウメ ムメ」、「馬 ウマ ムマ」といった借用語の場合と、大
 和言葉である「抱^{ウダク} ムダク」、「奮^{ウバフ} ムバフ」、「孫^{ウマゴ} ムマゴ」
 「鰻^{ウナギ} ムナギ」、「郁^{ウベ} ムベ」、「宜^{ウベナリ} ムベナリ」
 「荊・茨^{ウバラ} ムバラ」等の場合と
 は同一視することは出来ない。「梅」「馬」の表記に関して
 は、借用語たる漢語を日本語の音節でどう表記したか、言
 い換えれば、漢字音の「me」「ma」をどのように聞き、
 どのように表記したか、即ち「字米」「字麻」と表記したか
 「牟米」「牟麻」と表記したかにある。これに対し、「抱^{ウダ}
 ク ムダク」、「奮^{ウバフ} ムバフ」、「孫^{ウマゴ} ムマゴ」、「鰻^ウ

ナギ ムナギ」「郁 ウベ ムベ」「宜 ウベ(ナリ) ムベ(ナリ)」、

「荊・茨 ウバラ ムバラ」などの固有の日本語の場合は音の

近似によるウ・ムの交替、二重形の問題であり、本質的に異なる問題である。ウ・ムの下に [m] [n] [b] [d] 等の鼻音化した音がくることにより、鼻音化した [ɸ] と発音されるようになったものと推定される。つまり、音韻環境により自然に語頭が [ɸ] 音化されて発音されたのである。それが場合によっては下の [ɸ] [n] [b] [d] 音と融合されるようになり、語頭の脱落現象も生じるようになったものと見なされる。恰かも、アリ・ナリに助動詞ベシ・メリ・ナリが接した場合、アルベシ・アルメリ・アルナリ・ナルベシ・ナルメリ・ナルナリとなり、ルが撥音便化し、アンベシ・アンメリ・アンナリ・ナンベシ・ナンメリ・ナンナリとなり、更に、アベシ・アメリ・アナリ・ナベシ・ナメリ・ナナリとなったのと同事情にあると言うことができる。仮名が^{カリナ}カンナ→カナになり、童子が^{ワラハベ}ワランベ→ワラベになったのも同じである。撥音便のン [ɸ] が、ム [mu] → [m] → [n] となっていく経過を看案すると、前記の如き推定も、あながち否定できないであろう。勿論、漢語の「梅」、「馬」などとともに、漢字音の移入による [m] [n] [b] [d] 等の三内鼻音や [p] の鼻音化の影響も預っていることは否定できないであろう。

ムダク・ウダク・イダク・ダクのうち、現代まで一般的に用いられているのはイダクとダクである。確かにダクは口語的色彩が強く、イダクは文語的側面をもっている。しかし、ダクが具体的・物理的な行為を表わすのに対し、イダクが専ら抽象的・精神的行為を表わす^[注12]とばかりは決して言えず、そこに意味上の大きな差異はみられない。初めにも触れたが、ウダクは現代でも方言にはその姿をかなり留めており、決して死語とばかりは言えない。同じような音韻環境にあるバラも、方言においてはいくつかの形を留めているようである。エバラ・イバラ・バラは勿論のこと、八戸、宮城、山形などの東北地方には「野薔薇」のことをノバラ [no^mbara] と言っているという。特に山形地方において「薔薇」のことを^ンバラ [n^mbara] と言っているとすることは、いわゆる東北地方の鼻濁音とも言えるが、既述してきたことと関連もあるのではないかと興味を引かれる。

文献に姿を留めている古代日本語はほんの一部にすぎない。まして現実音は知る由もなく、推定の域を脱することは出来ない。言葉は一度文字表記されると固定化し、今度は逆にその表記に制約されて用いられていくという側面を持っている。表面に表われた語彙を、時代的に縦系を手繰るように捉えるだけでは、国語史の解明には繋がらないであろう。まして、時の政治、文化の荷い手によって、残さ

れた文献には片寄りがある。平安時代の朝廷文化を中心とした言語が規範とはなり得ても、当時行なわれていた言語の全てではない。ある意味ではそれが特殊なのであり、その底流には古代日本語本来の姿が庶民語、口頭語として流れ続け、漢文訓読、古文書等の世界で生き続け、武士の台頭とともに表の世界に表われてきたと見るべきであろう。そして、その一部は現在においても方言という形で生き続けていると見る方が、より妥当なのではあるまいか。

〔注12〕 半沢幹一「だく（抱く）いだく（抱く）」『講座日本語の語彙10』参照。

〔注1〕 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」〈広島大学文学部紀要特輯号3〉参照。

〔注2〕 拙稿「四つ仮名について―国語史的観点から―」〈福岡女子大学文学部紀要60号〉

〔注3〕 築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』参照。

〔注4〕 小林芳規『角筆文獻の國語學的研究』参照。

〔注5〕 『宇津保物語』の用例は全て『宇津保物語本文と索引』〈笠間書院刊〉によった。

〔注6〕 中田祝夫『古點本の國語學的研究』参照。

〔注7〕 中田祝夫『東大寺諷誦文稿の國語學的研究』参照。

〔注8〕 注3に同じ。

〔注9〕 大坪併治『石山寺本大方廣佛華嚴經古點の國語學的研究』参照。

〔注10〕 注7に同じ。

〔注11〕 注4に同じ。

「抱く」について